世界の科学編集者組織とその活動

Councils of Scientific Editors of the World

渡部 正孝*

財団法人 学会誌刊行センター

Watanabe M.: Councils of Scientific Editors of the World. *Igaku Toshokan* 1990 ; 37(4) : 285-292.

Councils of scientific editors like CBE, EASE and IFSE(A) may be defined as organs for scientific information which have been internationally and interdisciplinarily oriented and which are made up of individuals who are members independent of any creeds, thoughts and feelings of their own communities. Therefore their activities have been mostly accepted by learned societies of the world. Style manuals, refereeing policies, training programs, technological innovations in printing and even discussions of ethical aspects from the councils have had not a little impact on ordinary authors as well as editors. Many problems exist, which are derived from many regions and disciplines. However, by rejecting monologue but continuing to communicate, the members of the councils will mutually share in success and prosperity; i.e., to meet together is to meet with "exciting prospects ahead!" (M. Balaban, 1978).

I. 背景

標題として与えられたいくつかの言葉について最初に定義ないし説明をしておくことは、読者に理解していただける助けになると思う。

まず「科学編集者組織」といった場合に、典型的であり世界にインパクトを与えるものとして、CBE, EASE, IFSE(A) を挙げることに異論はないだろう。これらは等しく、比較的広い専門分野と広い地域（多くの国々）を含み、一般の娯楽的あるいは啓蒙的書籍・雑誌ではなく、極めて専門的な学術領域での編集者の組織である。限られた領域また限られた地域での組織も多く存在するし、世界の科学系出版社で組織する STM や大学出版部協会 (ex. AAUP, AJUP) そしてまた IFLA など類似の組織と考えられ、それぞれの

活動には明確な一線を描くことも難しい。しかしここでは、上記の3組織の起こりと今までの活動を中心に述べ、その他については付随的に触れるに留める。また、IFSEA はこの夏から IFSE として、新しい道を歩みはじめた。それ故 IFSE(A) については、これからの若干の展望について語ることも許されるだろう

本題の「組織」を説明する以上に「編集者」とは何かを定義することは困難である。ここでは結論だけを示し、章を改めて独立した節を設けることとする。『ELSE小史』を書いたジリアン・ペイジ (Gillian Page) は、ややユーモラスに、編集者の意味を広く取らざるをえなかった事情を書いている。「初期の問題の一つに会員資格ということがあった。一部の人たちから、生物科学分野の逐次刊行物で学問上の内容に関わっている編集者に限定して欲しいと言われた。会員資格を広く取るという決定は、その時、実際上の見地から採用されることとなった。つまり、会計役員に指名された者、この歴史を書いている私自身のことだが、この者は極めて厳密な解釈が「編集者」とい

* Masataka WATANABE : CAPJ (Center for Academic Publications Japan), 4-16, Yayoi 2-chome, Bunkyo-ku, Tokyo 113, Japan.

う言葉に与えられた場合、会員の資格を失うこととなるからである。」¹⁾ 事情はほかの組織でも同様である。勿論、会計役員が欲しいからではなく、性急な定義によって有益な人材を排除するという誤りを犯したくないという、まさしく実際的な見地による。多くの会員規定は「編集者もしくは関連の専門家」と定めており、例えば図書館員も含まれることになる。

最後に、「科学」についても説明が必要と思う。科学は狭義では自然科学 (natural science) のことだが、広い意味では学問全般を指すことはよく知られている。そして、これらの組織も確かに自然科学分野以外の人を排斥してはいない。しかし、現実はおおむね自然科学系の人によって占められている。更に、これらの組織の起源が生物学系の学問であったため、医学・生物学系の会員が多いこともまた確かである。彼らが、「科学の」編集者 (scientific editor) と言い、「学術の」を表わす、例えば academic, scholarly, learned を使うことが稀である (皆無ではない) 理由はここにある。

II. 着 想

1. その必要

レスター大学一次伝達情報研究センターのジャック・メドウズ (A. Jack Meadows) 教授に証言してもらおう。彼は『ある編集者の生活あるいは生涯』というお道化たタイトルで次のように告白している。「全ての編集者は、かなりはっきりと自分が初めに編集した雑誌のことを憶えているのではないかと私は思う。私の場合、加入していたある科学系学会によって発行されていた季刊誌であった。自分の論文や著書のためにそれ以前に労することはあったが、他の人たちの原稿を扱わねばならないということは、初体験であった。前任の編集者から、極めて短い予告と簡単な口頭によ

るものだけで引き継ぐこととなってしまった。そんな訳で、我が学びの始まりは試行と錯誤、わけでも後者すなわち失敗によるところが多い。」²⁾

メドウズの悩みは何であったのだろうか。投稿された論文の査読の手続きのことであろうか、あるいは印刷所との交渉か。彼の『生涯』という題は、自虐的に己れの運命を先取りしたものであって、彼はまだ健在である。問いたすことも可能であるがここは想像力を働かせてみよう。誰しも訴訟手続をするときには、素人には難しいから弁護士なり代書人なりに依頼することになる。しかし、原稿と印刷所がありさえすれば雑誌をあるいは本を出すのは簡単に思える。そして、そう思う人は始めてみるがいい。よし、できたとしても、いや確かに本はできるだろう。右往左往して出来上ったものは思い通りでない、だけならよい。遺恨を残す大失敗に、更に思いがけない高額請求書が追い討ちをかけることも稀ではない。これらのあらゆる責任を、著者や印刷所に転嫁できない“何か”がメドウズの悲運となった。

この悩みの生活の中には、単純な事務手続のことも議論の余地のある高度な事柄もあったと思われる。しかし、多くは繰り返しのあることであり他の編集者にも共通することであろう。大出版社の職業的編集者であれば、同僚と相談することも上級者からの直伝のノウ・ハウも多少はあるだろうが、第2次世界大戦後の学問の進歩が新しい分科とそれぞれの新しい情報を生み出してくると、それに見合う多くの編集者を必要とするため、等しく相まみえてお互いの体験を分かち合える場が求められた。

2. その歴史

1957年発足のCBE (Council of Biology Editors: 生物学編集者協議会) が濫觴であろう。当時の全米科学財団 (National Science Foundation) とアメリカ生物科学連合 (American Institute of

Biological Sciences) の発起で設立されたが、当初からのアメリカとカナダの編集者のほかは、主にヨーロッパではあるが、全世界に今では約800人の会員を擁する。中心は北米人で、会員の半数以上が女性であり、また研究者が少ないのが特徴である。これは全員が学位保有者であり、ほとんどが男性である EdEuChem や350人の会員中250人は学者 (scientist) であると答えた AESE (EASEではない。念のため。) と対照的である (いずれも筆者への私信)。この組織の名称である生物学には、実際は医学・薬学の基礎部門が全て含まれている。

CBE の名を世界に知らしめたのは、現在5版まで出ている “CBE Style Manual” (図1)³⁾ の編纂であろう。戦後の自然科学分野での学術用語として、英語が圧倒的な力を得てくると時を同じくしている。ただし、この成功の裏には、現在13版を数えるシカゴ大学出版部の “A Manual of Style” の存在があることを忘れてはならない。むしろ、今でも単行書を扱う編集者はこちらを参

照することのほうが多い。このスタイル・マニュアルは長らく不定冠詞 “A” を付して出版されてきた。それは1906年の初版以来、これが最良というものがないという自覚と謙虚さの現われであった (例えば12版序文)。しかし、1982年の13版から、通称の “Chicago Manual” で注文すると検索されないとか、単にスタイル・マニュアルと言えば別の物が届けられるといった類似の著作物に惑わされる利用者の不便を解消するため、やむなく “The Chicago Manual of Style” と改称している (13版序文)。⁴⁾

このように CBE のスタイル・マニュアルの場合も、出るとすぐ称賛と批判が共に待ちかまえていることから、度々の改訂を余儀なくされている。CBE は、北米以外の編集者にとってよき模範であるがときには反面教師であった。以下はヨーロッパでの出来事である。

ページの『ELSE小史』¹⁾ でもこの両面が記録されている。第2章によると「こういった組織の発想は、ユネスコの支持を得てアメリカにおけるCBEの成功とヨーロッパの地球科学編集者の同様な協会 (訳注: 後の Editerra のこと) を発足させようという要請とに鼓舞された、生物科学国際連盟 (IUBS) によって促進されたものである。」とあるが、第4章では「長い間 CBE との間で彼らのスタイル・マニュアルをヨーロッパの利用者にもっと受け入れられるように調整する話し合いが行われていた。検討委員会が当時 (訳注: 1973年) の第2版について大部にわたって詳細な調査を行った。しかし、それは第3版が発行されたときに、ものの見事に粉碎された。これは以前の諸版から趣旨も方策も共にまったく隔たったものであること、そしてますます我々の目的にふさわしくないことを露呈した。」と、北米の CBE ではヨーロッパの自分たちの身の丈に合わぬことを嘆くことになる。

図1. CBE style manual

III. 組 織

EASE があり, AESE があり, また, ELSE があることに読者は混乱せざるをえないだろう。以下に整理のために主な組織について年代順に略述することにする。また, これらの組織を担う「編集者」の像を, 後段で素描してみたい。

1. 種々の組織

CBE : Council of Biology Editors

創立1957年。北米中心の生物学(医学を含む)系の編集者組織であることは既に述べた。

AESE : Association of Earth Science Editors

創立1967年。同じく北米中心の地球科学系編集者組織。明らかにCBE に刺激されて組織された。

Editerra [Edi=Editors, terra=earth (?)] :

European Association of Earth-
Science Editors

創立1967年(?)。現在, EASEに吸入されている。AESE のヨーロッパ版組織と言える。“Editerra Editors Handbook”を残している。

ELSE : European Life Science Editors

創立1970年。既に前章で述べたように, これはCBE のヨーロッパ版であったことがページの『ELSE小史』で明らかである。Editerra と合併して現在はEASEに変わっている。

EdEuChem : Editors of European Chemistry

創立1970年。化学分野の編集者組織。会員約30名。東欧の研究者が多い。

IAAE : International Association of Anthropology Editors

創立1977年。南米等からの参加者も多い人類学の編集者組織。

IFSEA : International Federation of Scientific Editors' Associations

創立1980年。1977年, エルサレムで開かれた第1回科学編集者会議がその契機となった。⁵⁾ この

会議には我が国から故溝口歌子(日本癌学会テクニカル・エディターおよび学会誌刊行センター評議員)が参加していたことから, 第2回科学編集者会議(1980年, アムステルダム)の際に設立されたこの組織に, 学会誌刊行センターも職員を派遣して団体会員として加盟することになった。⁶⁾

この組織の特徴はいわゆる連合傘(federation-umbrella)として, 既存の組織や機関および個人を統合したことである。それ故, 学際的であり, 一層国際的なものとなった。この組織はこの夏, IFSE として組織改革を行ったので, そのことについては次章の活動と展望において取り上げる。

EASE : European Association of Science Editors

創立1982年。ELSE と Editerra が合併して発足した。両者は学問的背景を異にするが, いずれもヨーロッパに拠点があった。そしてこの両者を結び着ける契機も, あのエルサレムでの第1回科学編集者会議であったことをページは証言している。「この会議は ELSE と Editerra の両会員のより一層の相互理解の必要といかにお互いが共通の利害を有しているかを知る良い機会となった。」¹⁾

現在, 会員はおおよそ750人。CBE より国際性学際性共に高く, 日本からも7~8名が参加している。

AASE : African Association of Science Editors

創立1983年。IFSEA に刺激されたアフリカ地域の学際的な編集者組織で, 会員のトレーニングセミナー活動に特色を持っている。

ARESAF : Association des Rédacteurs et Editeurs Scientifiques d'Afrique Francophone

創立1986年。同じくIFSEA に刺激されているが, 北アフリカを中心とした旧仏領アフリカで, フランス語が高等教育で用いられる地域の編集者組織。

最後に、我が国の「学協会編集者懇話会」の名も挙げておくことにしよう。⁷⁾ 1985年に設立総会を持ち、現在の会員は約80名。創立者で初代の代表幹事は学会誌刊行センターの近江洋宏、次が日本機械学会の高橋征生、現在は日本化学会の佐藤正行が代表幹事を努めている。今秋、会報を発刊する予定である。

その他の類似組織については、次節で触れる。

2. 種々の編集者

箕輪成男は『情報としての出版』⁸⁾の第Ⅵ章「学術出版の担当者」の中で、学会・出版社・大学出版部の三つの輪を提示する。これは学術出版を担う法人あるいは団体が3種類あるということであって、自然人として編集者が3分されるということではない。しかし、この区分の中で職能としての編集者を探してみると、学会における編集者の構造は出版社や大学出版部とは異なるものがあることに気付かされる。

すなわち、学会においては研究と教育の職務に加え、他の研究者の成果を正しく評価したりあるいは公正に公表させることを義務付けられた一群が存在し、まずこの者たちに「編集者」という名称が与えられていることである。このような立場の編集者を最も判明に表現している言葉が、“author-editor”である。つまり著者でもある編集者という意味になる。なお、この意味で“scientific editor”を使う人もあるが、曖昧であると思う。

これらは学会というプロフェッショナルの集団の中で、特にその才能を買われて委嘱された者で無給あるいは実費支給程度の“part-time editor”がほとんどである。彼らの肩書はその長が“editor-in-chief”あるいは“chief editor”であり、単に“editor”であることもある。“associate editor”や“managing editor”も彼らにおおむね与えられる。学会で著者となることのない編

集者に与えられる肩書の多くは、“copywriter”と同義の“copy-editor”か“secretary”であろう。そのほかには“proof-reader”があり、比較的上級者にmanaging editorが与えられることもある。そして、彼らの多くは“full-time editor”であって学会職員であるが、独立して仕事を請け負う者“free-lance editor (またはfree-lancer)”も存在する。被らは“technical editor”と自称することも多い。

出版社や大学出版部には原則として著者である編集者は存在しない。勿論、皆無ではないし学術出版社の編集者は高学歴の者が多く、学位取得者が稀ではないことも認める。しかし、彼らは既に研究を中止しているか、少なくとも関与している分野の専門家ということではなく、一般的には一応の教養人として遇されているにすぎず、author-editor であることはない。彼らは職能としての名称である“acquisition editor”という肩書からスタートすることが多い。図書館の「受け入れ」と同じacquisition を業とするということは、売れる原稿を探し、売れる著者(学者)を発掘し、時には発表の機会を与えて育てるということであり、関与する分野への深い理解力・洞察力を必要とする。

もう一つの職能がcopy-editorでありproof-readerを含むことが多い。これは著者の生の原稿をより完成度の高いものにすることを業とし、言葉や形式に対する鋭い感性を要求される。この職能は学会にもいる。彼らが、編集者組織において直接にコミットする最大のものはスタイル・マニュアルである。

acquisition editorもcopy-editorも出版社や大学出版部では、等しく上級者を“senior editor”あるいはchief editorと称する。学会で一般的なeditor-in-chiefという格式ばった肩書を与えることはまずない。“publisher”という肩書は会社の代表権を有するか、それに近い高位の編集者で

ある。これらは全て full-time editor であり、“house editor”と呼ばれる。彼らの活動は常にリスクを負った経済活動であるという面に着目したい。そして彼らは独立した編集者としてよりは、それぞれの会社・出版部すなわちハウスの利益のために行動しなければならない。

個々の例を取るならば、その卓抜した活動力と経済力によって商業出版社から参加している編集者が EASEやCBEで重要な役割を果しているのを少なからず見受けることができる。しかし、有名な出版社の組織 STM (International Group of Scientific Technical & Medical Publishers) や大学出版部協会の AAUP (The Association of American University Presses) を含めなかった理由はここにある。つまりこれらの組織の参加者はおおむね、それぞれのハウスの代表 (representative) と目されるからである。

IV. 活動と展望

前章で披露した「編集者」にまつわる19種の語彙ノートは、収集した世界の編集者の名刺や会議録から抽出したもので、ひと口に編集者と言われる者の多様性は、ある程度認識いただけたと思う。著者と印刷所との中間で、原稿やゲラに手を触れる者は皆編集者と言える。しかし、例えば「図書館員」はこの荒っぽい定義においても編集者に含めることは無理であろう。

新しい IFSE の会員規定には「編集者もしくは関連の専門家」となっている。図書館員をこれらの組織に参加させるだけなら、これ以上の詮索は無用であろうしそれが目的ではない。私は、今までのこれらの組織の活動を概観し展望に話を進めるために、もう一度「編集者」にこだわってみたい。

言葉は語源的な詮索よりも実際上の用例から近づいたほうがより正しい意味に辿りつけることが

多い。言葉は時代によるねじれによって意味に変化が生じる。語源にとらわれることによって、かえって実相を見誤るからだ。前章で editor の多くの用例を見たのはそのためである。しかし更に将来的な展望を得るためには、過去の用例や語源にまで迫ることも、また有益であろう。

活動しているこれらの組織の英語の名称は、皆 editor である。ところが、この言葉はいかにもラテン語風であるのに、古典籍には現われてこないようである。たいていの英語の辞典は語源として、ラテン語動詞 edo の完了受動分詞 (形容詞と考えていい) editus を挙げている。edo ならギリシア語の $\delta\acute{\iota}\delta\omega\mu\iota$ (didōmi) に対応し、アオリスト (過去形と考えていい) には ϵ (e) の加音があるからここまで遡れるだろう。だからコンピュータ OS の MS-DOS の DOS はここから取ったのかと推理できる ($\delta\acute{\iota}\delta\omega\mu\iota$ の命令形が $\delta\omicron\varsigma$)。edo (う) も didōmi (ギ) も分け与える (英 give out, 独 herausgeben), おしみなくぶちまける, 公表するというのが元の意味であるから, なるほどとは思ふ。しかし, 英語の editor という言葉自体は時代の必要から近代になって生み出されたものではないかと推測する。(なお, ウェブスター編集局は初出確認を1649年としている。)

そうだとすれば, 雑誌や書籍に限らず, 情報のあらゆる仲介者, 例えば図書館員はもちろん電子出版者, インデックサー, サーチャーなどを本論での editor に加えてもおかしくないことになる。(例えば CBE と NFAIS : National Federation of Abstracting and Indexing Services との共同を見よ。) 勿論, 日常語としては抵抗があるが, 事実これらの組織の会議の標語には journal でも book でもなく, information transfer や communication というキーワードが増えてきている。この広い視野から生まれ, また生まれようとしている活動は次のとおりである。

1) 会議

一般の学会のように、研究発表のために集う者もいるが、対話を求めて集う者のほうが多い。これが重要である。多くの組織は、会議がそのまま国際会議であって経済的な負担がホストもゲストも大きいことから、開催は2～3年に1回である。その代り、地域的なワークショップは頻繁に行われているところもある。経済的に困難な国からの出席者に IFSEA などは補助を出していたし、研究発表を条件にユネスコに幹旋したこともある。

2) ニュースレターの発行

CBE は“CBE Views”を発行しており、EASE も年3回ながら大判24ページのものを発行している。このEASEの“European Science Editing”(図2)には時折、日本からも山崎茂明らの論文を見ることができ、内容的には充実している(旧誌名: Earth & Life Science Editing)。

CBE といい EASE といい、ニュースレターの発行は組織の活動を活発にさせる重要な道具だ

てであると思う。我が国の学協会編集者懇話会も、5年目にして会報を発行するとのことであり、期待される。反対に、この夏 IFSE として新しい一步を踏み出すことになった IFSEA は、メドウズの個人的な努力で発行された1号と2号で跡絶えてしまったことが、その後の活動を暗示した観がある。

3) スタイル・マニュアルほかの出版

スタイル・マニュアルについては既に十分述べた(II章2節)。一つ、図書館の人をお願いすることがある。これらのマニュアルの改訂版は update だけを意味しない。度々、単なる編集方針の変更によって改訂されることがある。例えば CBE の5版では3版～4版の豊富な資料が割愛された。だから、老婆心ながら、新版が出るたびに旧版を処分することはしないで欲しい。

科学用語として圧倒的な優位に立った英語は、北米とイギリスの編集者に活躍の場を与え、ミーブ・オッコンナー(Maeve O'Connor)やピーター・ウッドフォード(Peter Woodford)という有名な人を輩出させることになった。彼らの著書を受け入れている医学図書館は多いだろうから著作リストは省略する。ただ、オッコンナーがチバ財団の協力で1980年に出した小冊子“Model Guidelines for the Preparation of Camera-ready Type-scripts”について一言する。小冊子であるが故に所蔵しない図書館も多いだろう。しかし、この本こそ有力出版社のハウス・スタイル(出版社独自の執筆の手引き)に影響を与え、カメラ・レディーという術語を定着させた歴史的出版物と言える。3年後のフィラデルフィアでの IFSEA 会議に行ったとき、この術語は何の説明も要しないほど受け入れられていた。現在では一般の研究者も使っていることは周知のとおりであろう。

4) その他の活動と展望

直接の組織の活動とともに、これらの組織に加盟した一人一人の編集者がその成果を持ち帰って

図2. European science editing

それぞれの場に生かしてきたことも忘れてはならない。紙数も尽きる頃、枚挙にいとまがないが査読方法の多様性の啓蒙や公正な手続きの研究 (ex. ダブル・ブラインド・システム), バンクーバー・スタイルによる文献記載の標準化 (『医学図書館』もこの変形である。), 単位の表記法, 著作権問題の研究, 著者・編集者の倫理問題, 編集者教育, 印刷コストの軽減と迅速化 (ex. カメラ・レディー), 第三世界への援助, 等々の活動があった。

これらの活動は, 国際的であり学際的であるほど効果が大であろう。おそらく10年前の IFSEA の着想は正しかった。しかし一元化するのではなく, 多様な志向性を持った組織の併存も必要である。だから傘下の諸組織との関係に失敗している。今, 再び IFSEA の創立者ミリアム・バラバン (Miriam Balaban) が, それぞれの属する共同体にとらわれない個人会員を充実することによって, 新生 IFSE を発足させたいとのニュースを受けた。我が国からも旧 IFSEA 当時から引き続き学会誌刊行センターの近江洋宏が, また新たに国連大学出版局 (東京・渋谷) のアマディオ・アルボレーダ (Amadio Arboleda) が委員として

加わるとのことである。

まさしく, 会ってみなければ, 良き出会いもない。「前途には素晴らしい未来があらんことを！」(M. Balaban, 1978)。⁵⁾

引用文献

- 1) Page G. ELSE : a short history of the European Life Science Editors' Association. Earth Life Sci Ed 1983 ; 18 : 4-6.
- 2) Meadows AJ. The life of an editor. IFSEA Newsl 1982/83 ; 2 : 2.
- 3) Neter E et al. CBE style manual. 5th ed. Bethesda : Council of Biology Editors, Inc., 1983.
- 4) The Chicago manual of style. 13th ed. Chicago : University of Chicago Press, 1982.
- 5) Balaban M, ed. Scientific information transfer : the editor's role. (Proc. 1st Int Conf Sci Ed, April 24-29, 1977, Jerusalem) Dordrecht : D. Reidel Publ. Co., 1978.
- 6) 渡部正孝 第二回国際科学系編集者会議に参加して. 学会センターNews 1980 ; 79 : 1-2.
- 7) Smit J, Watanabe M. Japanese editors' group. Eur Sci Ed 1986 ; 27 : 16.
- 8) 箕輪成男 情報としての出版, 第VI章. 東京 : 弓立社, 1982.